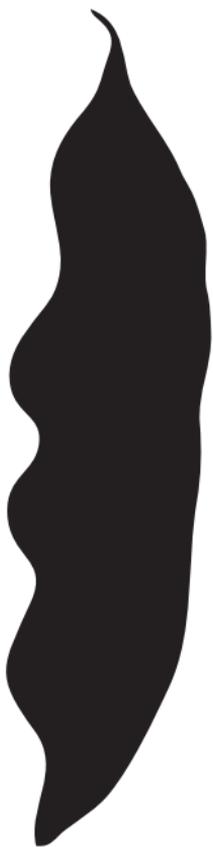


ま め



創刊号!

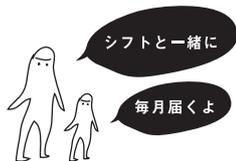
アクスぺによるアクスぺのための情報冊子
magazine from arc-sp, magazine for arc-sp.

vol. **1**
2011年11月

創刊号です!! 『まめ』というタイトル、なかなかインパクトあるんじゃないでしょうか。ある意味。いや、ほんとに。豆ってひとつのさやのなかに、いくつか並んでいますよね。そのひとつひとつの豆同士って、くっついてなんかなくて、ただ同じさやに入っていることでつながっている。そう、私たち介助者は、まさにお豆さんの一粒一粒なんだ、ということで、タイトルです。分かりにくいでしょうか。私たちは介助現場に直行直帰する介助者で、なんだか一粒のお豆さんが自由に動いているようだけど、実は「アクスペ」っていうさやでつながっている。もっと言えば、アクスペも自立生活センターとして自由に活動／運動しているようだけど、アクスペだって社会の一員なわけで、たくさんの人たちとつながっているわけです。そういうこと、自覚できればいいと思います。私たち介助者が、アクスペの一員だったことを感じるためには、まずはアクスペのことを知る必要があって思い立ち、これを発行することになりました。

『まめ』は皆さんからの意見や、どうでもいいような投稿お待ちしております。こちらからコメントをいただきに行くかもしれません。皆さんからの意見や反応をもとに、この『まめ』を作っていければと思っています。よろしくどうぞ。

文：I・M



新人さんです



体力をつけて頑張ります。

Y・M さん

12月よりアクスペ職員に

- Q. 応募のキッカケは？
何か人の役に立てればと思い応募しました。
- Q. 最近のマイブームは？
近所の美味しい店を探すこと。
- Q. 朝食はごはん派orパン派？
ほぼごはん派です。

O・K さん

11月よりアクスペに復職

- Q. 今の心境は？
嬉しくもあり、とにかく勤を取り戻せるようにしていきたいです。
- Q. 趣味は？
自転車で街を回ること。
- Q. 癒される瞬間は？
眠りについたとき。



離れていた間にいろいろ変わった部分もあるので、慣れていきたいです。



自然体で働きますのでよろしくです。

N・S さん

11月よりアクスペに復職

- Q. 今の心境は？
愛に溢れています。
- Q. 今、欲しいものは？
強い肉體。
- Q. 特技は？
楽器。

事務所リニューアル。

事業所えがくの設立にともなって事務所の内装も一新することに。機動性に優れ、さわやかに仕事ができ、誰でも入ってきやすい事務所にしよう！ってことで、アクセスの隠れた日曜大工たちの手を借り、事務所を模様替えしました。

模様替え1日目

11.7 (Mon)



IKEAに買い出し。



IKEAの倉庫内にて…圧巻！



11.8 (Tue)

模様替え2日目



作業中…
イスを組み立てる岡本氏。

書類整理中…



出来上がったテーブルでさっそく一服！
満足ー！

模様替え3日目

11.10 (Thu)



最難関！テーブル作り。加古さんの綿密な計画…。トントン、カンカン、Mさん大活躍ー！



加古さんご満悦。

岡田さんと新テーブル。



これからますます
使いやすく、居心地
の良い場にしていき
たいです。みなさん
見に来てください。
文：I



12

アクスベの来月の予定
arc-sp's schedule for next month.

アクスベの行動予定 & 代表・事務局長の動き

MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT	SUN
			1 介助WS	2 ピア・サロン 【岡田・加古】	3 東京出張 ・制作研究会 ・自立支援分科会 【岡田】	4
5 総合福祉法 学習会	6	7	8 介助WS	9	10	11
12 総合福祉法 学習会	13 総務会議	14	15 運営会議	16 戦略会議	17	18
19 忘年会	20 来客対応 【岡田・加古】	21	22 相談支援 事業者の 現任研修 【加古】	23 天皇誕生日	24	25
26	27	28 仕事納め	29	30	31	

ま め [vol.1]

2011年11月25日発行
デザイン・編集／N・K 本文テキスト／I・M
印刷・製本／アークスペクトラム 発行所／アークスペクトラム

今月の
キツ
カケ!



「介助現場の社会学」

身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ

前田 拓也

生活書院 2009年

「介助者」とは何だろうとふと考えてみたとき、この本を読んでもいいと思う。ますます混乱を極めること請負ですが…。だけど、その迷いやよく分からないといった感覚が、実は介助という営みにおいてはとても重要なのだということに気がかされるところです。

CILのこれまでの歴史において、介助者は障害者の「手足」だと言われていたことがありました。それには理由があります。

「障害者は『気まぐれな人間愛を恵んでもらう客体の位置』（石川）に置かれているという現状認識にもとづいていると同時に、介助者が『主体性の発揮できない仕事』であることを否定したいばかりに、『よさ』や『意味』を見出し、つくり、語ろうとすることへの牽制の意味があった」からだ。つまり、介助者は時に簡単に障害者に対して抑圧者になり得る。わざわざ「手足」と言うことによってやっと、障害者と健常者の「非対象性」を顕在化することができたというわけです。

では、障害者と健常者の「非対象性」とは一体なんなんでしょうか？

たとえば、障害者が背中ががゆいと言ったとする。介助者は背中をかく。それはとても分かりやすいし、まあ誰にでもできることです。でも例えば料理の介助をしていて、その介助者の料理の腕は、まあ、あんまり良くないとする。障害者が、「エスニックっぽい魚料理を作って」と言って指示をする。でも味付で、「ナンブルーひとかけ」と言われたとき、その「ひとかけ」の感じがいまいち分からなくて、全く障害者が描いていた味に辿り着けない。障害者の目的の達成度合いは、「場合によっては、（行為の）手段である（手足であるはずの）介助者のポテンシャルによって制限され」てしまう。「その利用者が、『ほんとうはしたいこと』（こんな味のエスニック料理が食べたい!）があったとしても、それを介助者に指示できないという時点で、介助者は彼の『したいこと』を知ることすらできないし、「さらには、『ほんとうはしたいこと』を知ることができないことによって、自分が利用者の『したいこと』に介入し、制限していることにもまた、気づくことはできない」のです。 →

「障害者は、介助の技法を、厳密な意味においては教えることができない。つまり、われわれの身体技法には言語化不可能な余地が必ずあることによって『教えられない』のであり、また、実際に『やってみせる』ことができないことによって『教えられない』のです。じゃあどのようにして介助者は介助技法を学び、介助者となっていけるというのか。

この著者は、それでも介助の技法はやっぱり障害者によって教えられ、伝えられたのだと述べます。「おそらく障害者は介助者へむけて、介助としてなすべきことの一定の「原型」をただ提示しているのではないかと考えられる。そして介助者は、彼らから与えられた「原型」に主体的にはたらきかけ、トライ&エラーを繰り返すことによって一定のやりかたを身につけ、ルーティン化してゆく。そこでは、基本的な「必要」を提示しているのはあくまで障害者自身でありつつも、同時に介助者にも、主体的な工夫、模索、あるいは反省を試みる可能性が残されている」と。こうやって、障害者と介助者の「介助現場」がつくりあげられていく。

「障害者の自立生活とは、介助を利用すること< によって >ではなく、介助者と関係を取り結ぶこと< において >暮らすことなのだ。「逆に介助者は、障害者の介助をすること< によって >介助者になるのではなく、障害者と関係を取り結ぶこと< において >介助者になるのもある。」

私たちは日々介助現場で「介助者」になっていくのであり、そのありようは全く教科書を読んで学べるようなものではないのです。

ややややこしかったでしょうか。おススメは、第2章「パンツ1枚の攻防」です。

文：I



from 総務

sub

給与体系変わりました。

事業所えがく設立に伴い、10月より給与と体系が変わりました。事業所説明会に参加された方はご存知かと思いますが、新しく固定基本給制度と残業手当が加わりました。

10月分給与（今月振込分）より適用されていますので、給与明細をご確認ください。

質問がある方やもっと詳しく聞きたいという方は、お近くの総務までお気軽にお声かけください。

— END —